



インタビューシリーズ

# 九大人

2011.7.29 interview



聞き手

田中冴季

たなか さき

芸術工学部

工業設計学科4年

舛本さん・久永さんのお二人とも、九州芸術工科大学のご出身です。卒業後は、大日本印刷株式会社に入社され、現在は、フランスのルーヴル美術館との共同プロジェクトに携わっていらっしゃいます。このプロジェクトでは、マルチメディアを駆使した新たな展示方法を開発。フランスのルーヴル美術館に常設の展示紹介が登場しています。今回は、お二人の大学時代の研究のことや、ルーヴル美術館との共同プロジェクトのお話など、芸術工学部工業設計学科の田中冴季さんがお話を伺いました。

このインタビューは平成23年7月29日 大日本印刷株式会社 五反田ビルにて行いました。

## 舛本 美和氏 PROFILE

昭和63年3月九州芸術工科大学 画像設計学科卒業後、大日本印刷株式会社入社。主な受賞歴はハイビジョン・アワード'92選定委員長賞、MMAグランプリ'95ハイビジョン部門静止画作品賞、第一回デジタルアーカイブアワード'00など。

株式会社DNPアートコミュニケーションズ  
企画開発部 ソリューション開発グループリーダー

# 舛本 美和

ますもと みわ

大日本印刷株式会社 C&I事業部  
第一トータルソリューション本部  
インタラクティブメディア&スペース企画開発グループリーダー

# 久永 一郎

ひさなが いちろう

## 久永 一郎氏 PROFILE

平成3年3月九州芸術工科大学 工業設計学科卒業後、大日本印刷株式会社入社。主な受賞歴はディスプレイデザイン協会ディスプレイデザイン大賞(朝日新聞社賞)'96など。

# 世界と闘う覚悟を持って、 社会に出よう。

### 新人の時から芸術工学を 活かした仕事に携わる。

—お二人は大学時代、どのようなことを研究されていたのですか。

**舛本** 私は画像設計学科の15期生で、視覚心理学を専攻しました。卒業研究は、「錯視の中の仮現運動」をテーマに、仮現運動における知覚の優位性が、形なのか色なのかといったことを研究していましたね。でも、大学4年間を通して、デザインから、印刷、写真、映像までいろんなことを勉強しました。当時、漠然と理解していた知識も、会社に入って実践で活用するようになった、「これってこういうことだったのか」と気付かされるのがたくさんありましたよ。

**久永** 私は工業設計学科で、インテリアデザインと人間工学を専門に勉強していましたが、音響設計や画像設計など、授業はたくさん受けていましたね。取得できた単位は少なかつたんですけど(笑)。振り返ると、基礎的なことをしっかり教えてもらったと思います。例えば、コンピュータの分野は凄いスピードで進歩していますが、CGを描く時、ブル代数の計算式を知っていれば、構造は変わらないのってほとんどのCGの描き方がわかるんです。

本質的なことは、時間が経っても変わりませんからね。

—大学時代に勉強したことで、仕事で役に立っていることって何でしょう。

**舛本** 私の場合、印刷会社に入りましたが、印刷メディアはほとんど扱わないセクションに配属されたんです。当時は、ハイビジョンが世に出たばかり。高精細の印刷データを映像に変換するというのが最初の仕事で、大学でやってきたことに比較的近いものでした。それが現在まで続いている感じですね。今は、自分の手を動かして作ることはありませんが、制作プロセスを理解していないとプランニングもできません。ですから、大学で学んできたことは、今の仕事で大いに活かされています。

**久永** 私は、人間工学的な見地から、人間中心の考え方を習得できたことが一番役に立っています。どんなに優れたものを作っても、人間が理解でき、使えなければ意味がありません。仕事を何を作るにしても、まず、人にとってどうなのかということを考えるようにしています。また、一般的には、入社から数年経って実力が覚えてきた頃から面白い仕事にチャレンジさせてもらえると思うのですが、我々のよ



ルーヴル美術館にも設置され始めています。このような実績を重ねること、日本の美術館にも私たちの技術を理解してもらえればと思っています。このプロジェクトの技術が美術館や博物館に導入され、広く一般の人たちにも使ってもらえるようになれば、社会の役に立っていることをもつと実感できるでしょうね。情報の押しつけではなく、作品と対話するきっかけを作ることができればと考えています。

**久永** 苦勞と言え、ルーヴル美術館の関係者とのコミュニケーションも大変でしたね。やはり日本人とフランス人では教育も文化も違うので、お互いを知るまでに時間がかかりました。慣れてきました、今も毎日、とても長いテレビ会議をしています。しかし、学ばせてもらうことも多いです。貴重な経験をさせてもらっていると思います。



パリ・ルーヴル美術館に設置された鑑賞システム

**ルーヴル美術館と共同で、  
絵画の新しい展示を企画。**

—お二人が進めていらっしゃるルーヴル美術館のプロジェクトは、どのようなことをされているのですか。

**舂本** ルーヴル美術館には30万点を超える膨大な所蔵品があります。その中から選ばれた数点の作品を展示し、マルチメディア技術を使って情報提供をしているんです。10月からはじまった展示で8回目になります。現在、主要なプロジェクトメンバーは約30名。久永はプロジェクトマネージャーとして動いていて、私は具体的なコンテンツ開発に携わっています。

—このプロジェクトには、芸工大出身の方が多く関わっていらつしやると聞きましたが、お二人はどんな経緯で関わることになったのでしょうか。

**久永** まずこの仕事が弊社にきた経緯ですが、ルーヴル美術館長のアンリ・ロワレット氏からの依頼でした。背景には、フランスの若者の美術館離れがあったようです。それを止めるためにルーヴル美術館は、国から美術館教育を改革するように言われていたのです。それでロワレット館長は、ルーヴルが21世紀の新たな美術館に変わるために

**大学時代に視野を広げ、  
自分の基盤を築いておくこと。**

—私も、このプロジェクトに被験者として関わらせてもらったのですが、仕事を通じて、同じ大学の卒業生や在學生と関わりを持つことをどのように思われますか。

**久永** 他の大学にない特色や圧倒的な実力を示せなければ、母校であっても協力を頼むことはできません。つながりがあるからという理由だけで頼むと、社会人としての品格を疑われます。九大に共同研究をお願いしたのは、必ず結果を出してくれるという確信があったからです。個人的には、九大の現役の学生さんとのリレーションは、もつと大事にしたいと思っています。デザインの研究などは新しい発想が必要ですし、もつとコラボレーションをやるべきだと思いますよ。

—最後に、現役の九大人にどんなことを望まれますか。

**久永** インターネットが発達して、今はとても簡単に世界とつながります。そういう意味では、地方大学という概念はなくなりました。その反面、競争は大変ですよ。私たちの時代は、福岡のどこかに格付けされていました。今は世界のどこかに格付けされま

必要なパートナーを世界中で探していました。そこにヒットしたのが、日本の大日本印刷だったというわけです。

**舂本** プロジェクトは、2006年からスタートしましたが、動き出したのは2005年です。当初は私たちを含む5人のメンバーが各部署から集められました。でも最初は、何をしたらいいのか全くわからなかったんです。その後、少しずつやるべきことが見えてきて、それに必要なスキルを持った人を募っていったら、自然に芸工大出身者が集まったんです。

—プロジェクトを進める上でどんなことに苦労されていますか。

**久永** マルチメディアの功罪とも言いますが、映画と絵画と並んでいけば映画の方がおもしろいですよね。どうしても眼がメディアの方を追ってしまつて、本当に見てほしい絵画はなかなか



す。70億人を相手にするわけだから、社会に出た時点で世界と闘う覚悟が必要でしょう。海外の学生と話す機会もあります。彼らは本心に積極的です。自分が今どのレベルにあつて、どこで何を表現するのか、グローバルに考えようとしています。九大の学生の皆さんにもそうあつてほしいですね。大学時代に、将来、誰を相手にするのか、自分の視野を広げておくことも大切だと思いますよ。

**舂本** 社会に出ると、イレギュラーなことがたくさんあります。そんな時、自分が立ち戻る場所というか、ベースになるものを持っていると強いんです。大学の時は、目の前のことで精一杯でしょうが、後からわかることもたくさんあるはず。社会に出たら楽しいですよ。ぜひ、大学時代に自分のベースに

見てもらえない。それはなぜなのかを考えさせられる日々です。

マルチメディアは情報が多いし表現も豊かにできます。AとBの関係は、一本の線を引いてあげるだけですぐにわからせることができます。でも、わかりやすいだけでは美術鑑賞に真に役に立っているとは言えないんです。一度は線を引いてあげても、その次からは絵と絵の関係を自分で線を引けるようになってもらわなければならぬ。その加減が難しいんですよ。

**舂本** 私は、他の美術館や博物館の仕事もしていますが、従来型の映像番組やデータベースの域から一歩先に踏み出してもらえないことが多いんです。私たちが手掛けている展示企画は、年間850万人の人が訪れるパリの

なるものを築いて、世界と闘える力を養ってください。



ルーヴル-DNPミュージアムラボ  
第8回展のお知らせ

**LOUVRE-DNP**  
MUSEUM LAB

来世のための供物展  
古代エジプト美術から読み解く  
永遠の生への思い

今回の展示では、古代エジプト人の葬礼に関する考え方を現代に伝えています。会場では、王家に仕えたサケルティという高官のためのステラ(石碑)を中心に紹介。独自に開発した映像装置を使って、供物を奉納する儀式に参加するなどの体験ができるということです。

【会期】2011年10月8日(土)~2012年3月4日(日)  
【開館時間】金/18:00~21:00  
土・日/10:00~18:00

【料 金】観覧無料、予約制  
【会 場】ルーヴル-DNP ミュージアムラボ  
東京都品川区西五反田3-5-20 DNP五反田ビル1F



内務の長サケルティのステラ  
紀元前1970年-紀元前1900年頃/石灰岩、彩色  
ルーヴル美術館、古代エジプト美術部門  
©2011 Musée du Louvre/Christian Décamps